

『#おろしや国酔夢譚』（井上靖著）を読んでみた。1966年－68年、「文藝春秋」に連載された。著者の主な代表作は「闘牛」、「氷壁」、「風林火山」、「天平の薨」、本作、「敦煌」、「しろばんば」、「あすなろ物語」（私の母校、旧制沼津中学時代）。「闘牛」で芥川賞を受賞。紀行文や各地の美術評論なども多い。文化功労者、文化勲章受章者。

天明2年12月（1783年1月）、伊勢を出発し、光太夫ら17人を乗せた船「神昌丸」は、江戸へ向かう途中に嵐に遭い、舵を失って漂流中に1人を失いながらも、8か月の漂流後に当時はロシア帝国領だったアムチトカ島に漂着した（添付されている地図で見ると、アラスカ半島に近い）。この島で7人の仲間が次々と死んでいくが、残った9人は現地のロシア人の言葉や現地の言葉を習得しながら帰国の道を模索する（ロシアで暮らす中で光太夫らはロシア語を習得。ロシア語をペラペラ話し、書くこともできたようだ）。漂着から4年後、それまでロシア人に保護される立場だった光太夫らは逆に指導的立場に立ち、難破した船の木材や流木を活用して船を作り、ロシア人と共に島を脱出し、カムチャツカへ向かう。だがここで待っていたのは島とは比較にならない厳しい冬将軍で、さらに3人を失った。残った6人は、現地政庁の役人たちと共にオホーツクからヤクーツク経由でイルクーツクへと向かうが、1人が重い凍傷で片足を失ったため帰国が不可能と悟りロシアに帰化する（ロシア正教に改宗することは帰国を諦めることを意味した）。また、さらに1人が病死する。この地の政庁に帰国願いを出しても届かないことに業を煮やした光太夫は、当地に住んでいた学者の助けを借りて、女帝エカチェリーナ2世に帰国願いを出すために、ロシアの西の端の帝都ペテルブルグへ向かった。数か月後、女帝に謁見し帰国を許される。この際、ロシア政府は日本との通商を目的として、光太夫たちを届ける予定でいたため、商人であった光太夫から日本の商業についての情報が聴取されている。

日本に対して漂流民を返還する目的で遣日使節に伴われ、漂流から約10年を経て3人で根室へ上陸し、帰国を果たした。松前藩を経由して江戸の幕府に伺いを立てる必要があつて交渉に時間がかかり、一行は根室で越冬を余儀なくされた。この間にこの地で、一人壊血病で死亡した。残る2人が江戸へ送られた。

帰国後は、11代将軍徳川家斉の前で聞き取りを受けた。海外情勢を知る光太夫の豊富な見聞は、蘭学発展に寄与することになった。この頃から幕府も樺太や千島列島に関して防衛意識を強めていくようになった。その後、光太夫たちは

江戸番町の薬園に居宅をもらって生涯を暮らした（故郷に帰ることは許されなかった）。

2003 年に吉村昭氏が新資料を元に小説『大黒屋光太夫』を発表しているそう
だ。本作『#おろしや国酔夢譚』は 1992 年、映画化されている。

江戸時代に、厳寒の海洋で遭難しながら、10 年近くの歳月をかけて日本への帰
国を果たした男たちの物語であるが、南極探検でのシャクルトンに勝るとも劣
らない壮絶な生きざまである。